戦中回顧

染矢　巌
（会員　鶴見町吹浦）

私は昭和十五年から戦後まで、佐伯市上灘区にあった佐伯南台造船所の船大工として働き、戦時中には主として木造上陸用舟艇（大発）や、百トン級から二百五十トン級の計画造船の建造に従事した。また、昭和十九年以降、家から通勤する様になると、西中浦村警防団吹分団員という任務も加わった。そこで職場その他でいろいろ貴重な体験をする事が出来た。

戦時中の事で語り継ぎたい事は多々あるが、特に印象に残っている事を少し書いてみる。

◆佐伯地方の空襲

昭和十九年頃から、時々一機でB29が高度一万メートル位の所から偵察に来る事はあったが、実際に佐伯地方が空襲を受けたのは昭和二十年三月十八日午前九時頃、艦載機の攻撃を受けたのが最初だったと思う。

それは土佐沖に接近した米軍機動部隊の艦載機グラマンF6二十機と、カーチスSBZCヘルダンバー艦爆機によって、佐伯・大分方面の軍事施設が初めて空襲された。この時、米軍機も何機か撃墜したが、我が方も航空隊や掩体壕の飛行機などに、被害が出た様であった。

たまたまこの朝、吹浦から葛港の農業倉庫に配給用の米を積みに出掛けた浜地区の役目の人七人が、何も知らないまま押し舟で航空隊東北沖七十メートル附近でこの空襲に遭遇し、九死に一生を得て引き返すという事件があった。

当事者の話によると、航空隊沖に差し掛かった時、飛行場の一角にある機銃陣地で、兵隊が手を振りながら大声で何か叫び、高射機関砲を旋回させていたが、まさか空襲されているとは気付かず、遥か南西方向上空に小型機の大編隊が現われても、演習だろう位の考えで、そのまま舟を進めていた。ところが、小型機は編隊を解くと同時に急降下しつつ、バリバリッと機銃を撃って来た。航空隊からも応戦が始まり、初めて「こりゃー戦争ぞ」と気付き、急いでオモテのサブタの下に逃げ込んだが、

櫓を押していた二人は逃げ遅れ、空き俵の束を頭に冠り、胴の間で震えていたという。ひとしきり攻撃して上昇して行った米軍機が旋回して再び攻撃して来るまでに、必死で櫓を漕いで引き返したが、まだ陸までには間がある時に再び襲って来た。全員櫓に取付き死にものぐるいで番所の鼻に辿り着き、砂浜に乗り上げると同時に跳び降りて岩の影に逃れ、そこで見た彼我の攻防は唸る機関銃と激しく飛び交う曳光弾に、よくも無事逃れ得たものだと全員震えが止まらなかったという。米軍機は翌十九日にも来襲し、米水津村浦代で出征兵士と見送りの人が銃撃されるなど、各地で被害の話があった。

四月に入るとサイパン基地からB29の大編隊が毎朝五時頃になると定期便の様に、ウォンウォンと爆音を響かせて豊後水道を北上し、頭上を越えて北九州方面に向かっていたが、四月二十六日の早朝、低く垂れ込めた雨雲の上から、B29の大編隊により大量の大型爆弾を投下され、航空隊・防備隊は勿論、佐伯市内や吹浦にも大きな被害が出た。この時はB29爆撃機二十三機から、七十発の（二百五十キロ）大型爆弾が投下されたという。

この空襲で大河原の中矢清氏方は大型爆弾の直撃を受けて家屋（四×六間の住宅）は全壊し、直径十メートル・深さ一・五メートル位の穴があいた。幸い家族は山際の防空壕に避難していたので無事だった。また、中には多数の時限爆弾も混じっており、納地島や三ツ栗島附近の吹浦湾内でも次々に爆発した。同日午後には櫛谷国繁氏方の庭でも爆発し二階建の納屋が倒壊した。その爆弾の破片（十センチ四方位）は、直線距離で六百メートル以上離れた浜区の染矢宇平氏方の甘藷床まで飛んでいた。

佐伯市内でも佐伯中学（現鶴城高校）の校舎、馬場の防空壕、城山頂上の毛利神社本殿が直撃を受け、市民四十六人が即死したとのことである。

その日私は警防団勤務は非番だったので、午前六時頃小雨の中、灘山を越えて造船所へ急いでいた。峠を越えて中腹に立つ三本楠のあたりまで下った時、雲の上でカラカラカラ、キューンという音がして、頭上を幾筋もの黒い線が佐伯の方に走った、と思う間もなく航空隊や長島山のあたりで、大きな爆発音と共に赤い火柱と黒煙が噴き上がり、それが次第に城山の方に移っていった。その時背後の吹浦でも大きな爆発音がした。急に恐ろしく

なって必死で駆け下り、常光庵の後ろにあった防空壕に走り込んだ。ひとしきり爆発音が続いたが、爆音も遠ざかったので急いで吹浦に引き返し、警防団詰所へ走った。そこで中矢氏方が被爆したと聞いたが、当日はまだ時限爆弾が次々に爆発しており、危険なので一応待機し、翌日後片付けに出動する事になった。

翌二十七日、吹地区の警防団員全員が出動し中矢と解谷の二軒の後片付けをした。この時、中矢氏方から約二十メートル離れた解谷好己氏方の甘藷床（いもどこ）に、まだ時限爆弾が埋まっているというので、団員の中から決死隊を編成し、二人一組になりくじ引きで順番を決め、二十分交替で掘ったが遂に掘り当てる事は出来なかった。其の後、この爆弾は約十四年六ヶ月経った昭和三十四年十月二十八日の夜中に爆発し、爆風で同家は南東方向に建具の上下で十五センチ程も傾いたが、幸い就寝中の家族に怪我はなかった。あの日決死隊で爆弾掘りをした私は、この時は消防団の分団長として被害調査に立会うこととなった。

五月四日、当時佐伯航空隊に展開し、土佐沖・日向灘に集結して、来襲するB29の迎撃に当たっていた陸軍の飛燕戦闘機隊が同日早朝出撃し、土佐沖に集結中のB29を迎撃、第一次米軍機集団を撃退して午前十時頃帰投、急いで燃料・弾薬を補給中、後を追う様に低空で進入して来た十機余りのB29に投弾され、ほとんどの機が大破炎上し、死傷者多数を出すという惨事となったが、この時の爆撃を吹地区から見ていると、まるで椎の実でもこぼす様にB29の胴体から落ちて行った。この頃、吹浦湾には、鯛網代の鼻に一隻、今在る浜の受波止の先端辺りに二隻、海防艦が待避していた。

五月十三日、佐伯は米軍機動部隊艦載機による執拗な波状攻撃を受けた。この日は一日中爆弾・焼夷弾の投下と機銃を交えた波状攻撃が繰り返され、佐伯海軍防備隊が全焼した。私は警防団の監視哨当番で、旧吹小学校（分団本部）の上にあった泊山の壕に詰めていた。壕といっても、『いもつぼ』の屋根を少し補強しただけの粗末なものだった。航空隊・防備隊を攻撃した米軍機は、機銃を撃ちながら低空を日向灘方向に逃げて行く。何度もヒュン、ヒュンと至近距離を機銃弾がかすめた。極く近い時にはシュッ、シュッと聞こえた。監視哨の壕から

も防備隊方面に濃い黒煙の上がるのが確認された。吹浦でもこの日の空襲で浜地区の庵や、染矢宇三郎氏方など屋根瓦を撃ち抜かれていた。奥地区の古矢広吉氏方では、裏の壁を機銃弾が貫通し布団に刺さっていたという。その日夕方、曳光弾によって平田の山林がくすぶる火災が発生、警防団と村人が駆け付けて無事消し止めた。この後も度々空襲はあった。

◆特攻を見送る

昭和二十年四月六日午後六時三十分頃、薄暮の豊後水道水の子島遥か沖合を、戦艦を中心にして南下する艦隊の姿があった。戦後になって知った事だが、これが片道燃料を積み、駆逐艦を従えて沖縄方面に特攻出撃する戦艦大和最後の姿だったという。

私は造船所で一日の仕事を終えての帰途、今は亡き大谷善治・山本茂両大先輩とたまたま灘山峠から見送ったのである。辺りはもう薄暗くなって鈍く光る海上に、点々と浮かぶ黒いシルエット。巡洋艦らしい艦を先頭に、駆逐艦らしきものが四隻一列縦隊に、その後を戦艦が左右に二隻ずつ、これも駆逐艦らしい艦を従えていたが、中央の戦艦に対して回りの諸艦のあまりにも小さく見えたのが印象的で、今でも瞼の裏に焼き付いている。

その時私達には支援機の姿は見えなかったが、最近友人から借りて読んだ「佐伯と海軍」という本の中に、あの時「佐伯航空隊の零式水上偵察機十四機が直衛（じきえい）と前路掃討のため、十六時十分より二十時まで出動し、十八時三十分頃、宮崎県細島沖で敵潜水艦らしきものを発見攻撃を加えた」と書いてあるのを読み、その頃、遥か南の方角でドドドーン、ドドドーンと遠雷の様な音が響いていたのを思い出した。また、翌七日午後、徳之島西方洋上での大和最後の記事を見て、両先輩の「なんぼ大和が優秀な艦でも、まわりの艦があげーこめえ（小さい）艦ばっかしじゃー頼りにゃならんのう」と洩らした言葉をしみじみ思い出した。

戦局は益々激しくなり、私達が大和艦隊の出撃を見送った前後の四月上旬の或る日、私達の勤めていた造船所の社長に、白石哲夫少尉の特攻機が本日午後佐伯に飛来しており、明朝佐伯航空隊から出撃するから家族に極秘裡に知らせてやって欲しいと依頼があったという。当時特攻隊員は出撃直前基地に家族を呼び、最後の別れを

して遺品を手渡していたらしい。同少尉は東灘区の出身で当時二十五歳だったが、兄善太郎氏は徴用機帆船の船長として中支方面に出征中であり、母はリューマチで寝たきりの病人で、義姉も姑の看病と家事のため家を空けられない状態だったので、福岡県太刀洗飛行場から出撃のため、鹿児島県知覽飛行場に移動する途中で、郷里の航空隊に立ち寄り、せめて寝たきりの母と懐かしの故郷に陰ながら最後の別れを告げさせてやりたいという隊長の温情だった由で、家族には何も知らされていなかったが、着陸後、市内で病院を経営する従兄の西田茂氏と叔父に当たる堀口氏が内密に知らせを受け、急拠航空隊に赴き、極秘裡に面会して遺品を受け取り、夕方西田氏と親交のあった社長が、明朝出撃の事を家族にこっそり知らせてやって欲しいと頼まれたそうである。

私達は翌朝始業前の朝会で社長から特攻機発進のことを聞き、爆音が始まったら各自浜に出て隠密裡に見送る様にと言われ、始めて知ったのである。作業に掛かって間もなく、花冷えのする朝の空気を破って、航空隊の方で爆音がしはじめた。工員は皆作業を止め、川岸に並んだ。やがて一番機、二番機、三番機と三機が次々に離陸し、女島の上空を翼を振りながら上昇して行った。なかでも二番機が別れを告げるかの如く、大きく翼を振りながら上昇して行った。私達も帽子やハッピを脱いで打ち振って見送った。女島上空から蛇崎上空を経て、堅田上空へと上昇しながら一旋回して来る間に編隊を組み、南の空に飛び去ったが、二番機は見えなくなるまで翼を降り続けていた。

聞けば母御も兄嫁と鳥越に嫁いでいる少尉の実姉の手を借りて、自宅の縁に布団を敷き、そこから消えて行く我が子の最後の機影を見送ったという。この兄嫁という人は当鶴見町地松浦の出身だった。

同少尉は四月二十二日、陸軍特攻第八十一振武隊員として知覽基地より出撃、沖縄方面で戦死した。

◆入隊中止第一号

八月十五日正午から、ラジオで重大放送があるからと言われ、地区に二～三台しかなかったラジオで聞いたが、雑音がひどくほとんど聞き取る事は出来なかった。それが終戦を告げる玉音放送だったと後になって聞いたけれども、当時はまだ放送内容が解からぬままだったの

で、日本が負けて戦争は終わったのだという説と、いや日本が負ける訳がない、あれは敵の謀略に負けない様、我々は一層団結を固め、とことん戦い抜こうと言ったのだとの説があり、非常に混乱していた。

たまたま私は八月二十五日に、神奈川県藤沢市の海軍航空隊に航空整備兵として、現役入隊する事になっていたので、困って役場の兵事係に問い合わせたが、軍の上層部も混乱しており、大分の連隊区司令部とも連絡が取れぬので、一応入隊する線で準備する様にとの事で、現役証書、旅費、運賃割引証など送って来た。そして追伸として、去る六日広島に大型の特殊爆弾が落とされて、附近一帯ひどく破壊されており、汽車も一部不通になっている由だから、余裕を持って一日早く出発する様にとの事であった。そこで二十一日出発の予定を二十日の出発に変更し、一緒に同航空隊に入隊する沖松浦の鉄崎留夫君とも、出発時刻、船の打ち合わせなど細かい打ち合わせも済ませ、用意万端整えて、いよいよ出発の時を待つばかりとなり、出発前々日の夜となったが、どうも諸説紛々、去就に迷った揚句、せめて憲兵隊に行けば何か判るのではと思い、夜の明けるのを待ち兼ねて山越して佐伯に行き、先ず久成寺に立ち寄って武運長久のお守り札を受け、憲兵隊に向かった。その時お参りに来ていたお婆さんが、「引き揚げて来る兵隊もあるというのに、あんたこれから行くのかえー、ご苦労じゃなあ」と言ってくれた。

午前八時前に憲兵隊の正門前に到着したが、門外で入ろうか、入るまいかと迷っている二人の青年を見掛けた。一見それと察したので声を掛けると、矢張り同じ日に同じ航空隊に入隊する仲間で、役場で聞いてもはっきりしないので思い余って此処まで来たものの、門を入るのが怖くてうろうろしていたとの事。「それじゃあ三人で勇気を出して入ろう」という事になり、憲兵隊の玄関に立ち、大きな声で案内を乞うたが誰も姿を見せない。再三呼び掛けたが何の返事もない。約十五分程経った頃、廊下を急ぎ足で行く上等兵の姿を見付け、呼び止めて来意を告げた。「そうか、そういうことなら上官に聞いてやるから其処で待っておれ」と言って室内に消えた。しかし、三十分程待ったが一向に音沙汰が無い。其の間二～三度別の憲兵が書類を抱えて走って行くのが見えた。四十分程して先刻の上等兵が廊下に見えたので呼

び止めた。「おう、お前達まだ居たのか、今重要な会議中なので此処から直接問合せてやる訳にはいかん。お前たち帰って役場か警察署に行って大分の連隊区司令部に問い合わせてもらえ」、と言い残して急いで去った。待っている間にお互いの住所・氏名・佐伯駅で落ち合う時間など話し合っていたので、結果が分かり次第お互い役場を通じて知らせ合う事を約して別れた。両人は堅田の寺島さん、匹田さんといった。

私は帰りに佐伯警察署に直行して、この事を話したら、受付の警察官は「兵事係の方は今ちょっと外出したからそこのベンチで待つ様に」と言われた。待っている間中、警察はひっきりなしに電話でどこかと連絡を取り合っていた。話しの内容はどうも婦女子を田舎の方に疎開させるための受け入れ先の手配の様だった。一方、武装して腕章をつけた海軍の巡羅が三～四人ずつ三十分置き位に立ち寄って、打ち合わせをしては出て行った。

九時過ぎから昼過ぎまで待って、やっと兵事係の平岩巡査部長が帰って来た。事情を話して大分連隊区司令部に連絡をお願いした。しかし混乱しており、「やっと電話が通じたと思ったら、すぐ切れた」とまた三十分程待たされた。二時頃になってやっと連絡が付き聞いてくれた。部長は受話器を置くと、「君、残念だけれど入隊は中止と言うがのう」と言われた。そこで礼を言って帰ろうとする私に「君、忘れるなよ、君が佐伯署管内での入隊中止第一号だからのう」と声を掛けてくれた。

急いで帰り、旅費や現役証書などを持って役場に返納と堅田の両君への連絡依頼に松浦へ急いだ。途中松浦峠で「当局との連絡は付かないが、出発は見合わせた方が好かろう」という役場からの手紙を受け取った。役場に行って今日の経緯を話し、両君への連絡をお願いして帰った。こうして昭和二十年八月十九日は私にとって、生涯忘れる事の出来ない記念すべき日になったのである。

因みに翌二十日は旧暦の盆の十四日、吹国民学校の校庭で吹浦地区合同の盆踊りが行われたが、山内(旧姓元谷)清市氏は、その日午後復員したとかで、もう盆踊りの太鼓を叩いていたのである。